

モンテーニュの『エッセー』を読む (その1)

藤原 道夫

高校を卒業する頃までに大概の生徒はモンテーニュ（1533－1592）の名前をどこかで聞いているだろう。しかし、著書の『随想録』ないし『エッセー』を読んだ人は稀だと思う。なにしろ16世紀に書かれた文章で、ストーリー性がない上にとっても長い。

友人 Y さんは随分前に神田の古本屋で『随想録』（関根秀雄訳、全3巻、白水社、昭和10年）のノーカット本を見つけ、値段を確かめることなく買ったとか。古書ながら未だカットされていない部分があり、愛用のペーパーナイフで頁を切り開きながら読む楽しさも味わっているよう。どこから読んでも面白いという。

その方の影響で、私も数年前から思い出しては『エッセー』（原 二郎訳、全6巻、ワイド版岩波文庫）の所々を読んでいる。全体はタイトルのついた107章から成っているが、各章が筋だって書かれている訳ではない。モンテーニュはこの著書を生涯にわたって改訂ないし追補していて、よく脱線する。また、随所に古代の古典からの引用文を挿入している。本人はいたって呑気で、この書は「そもそもぴったり合わない寄せ木細工のようなものだ」と嘯く。

「わたしは、つましく、輝きもない生活を披露するわけであって、それはそれでかまわない。人生についての哲学というものは、豊かな実質をともなった生きかたにも、また、市井の一個人の生きかたにもあてはまるのだから、これでいいのだ。人間はだれでも、人間としての存在の完全なかたちを備えているのである」

「われわれは、自分自身のありようをいかに使いこなすのかわからないから、他の存在を探し求めるのだし、自分の内側を知らないために、自分の外側に出ようとする。でも、そうした竹馬に乗ってもどうにもならない。・・・どっちみち自分の足で歩かなければならないではないか。・・・われわれはやはり自分のお尻の上に座るしかない」

（訳文は宮下志朗『モンテーニュ』岩波新書、2019による）

こんな調子で書かれており、じっくり読むと16世紀ボルドー（フランス）で知的に生きた男の本音が聞こえてくるようだ。そして時代を越えて心にひびくエスプリが伝わってくる。